

藁仕事を作業療法に応用した経験について

田村 美奈子¹⁾・高網 義博¹⁾・倉田 和夫²⁾

はじめに

当院リハビリテーション科は、主として脳血管障害を対象としているが、実際には、特に上肢の機能回復がプラトーに達しないうちに退院する事も多く、家庭に戻ると精神機能、運動機能共に低下することも少なくない。このため、身近な材料を利用し、退院後も家庭内での訓練につながる作業を授け、入院中の機能訓練時からそれを取り入れることを考え、主に農村部の患者を対象として藁仕事を試みた。

I 藁仕事の基礎と手順

1 藁打ち作業

木槌と石臼を用いて藁を叩く。重さ2.5kg程の木槌を持ち、藁束を叩いてゆくが、時々藁をまわ



図1 石臼上の藁を叩き柔軟性を持たせている

したり、位置を動かしながら行なう(図1)。

2 縄ない作業

柔軟性を持った藁の一端を足やお尻の下にはさみ、両手を擦り合わせるようにしながら行う。これは、母指で2本の藁束を分けながら行なわれる。この時の2本の藁束は、目的に応じ、太さが様々に調節される(図2)。



図2 縄ない作業、目的に応じ2本の藁束の太さが異なる

3 藁製品への組み立て

柔軟性を持った藁と、適当な太さになられた縄を用い作品を組み立ててゆく。次に藁製品の作業過程を作業場面に即して紹介する。

1) 草鞋作り：足指あるいは、図3の様な台に縄をかけ、片手でピンと張りながらこの縦糸に織り込むように藁を渡してゆき、草鞋の本体が作られてゆくが、途中紐を通すみみを図4の如く左右の端につける。図5の如くにして、踵の部分を引き締めて終了。

¹⁾長岡中央総合病院理学診療科 ²⁾同整形外科

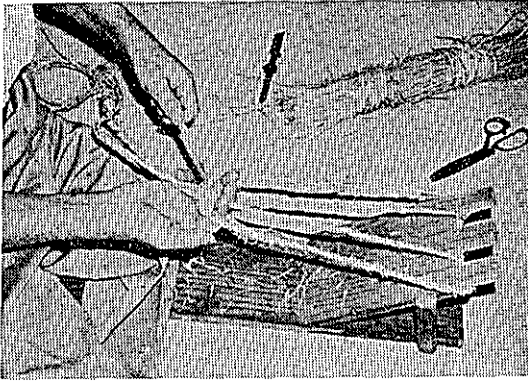


図3 足指の代りに「のめし」と呼ばれるこの台を用いる



図5 踵のひきしめ



図4 みみのとりつけ

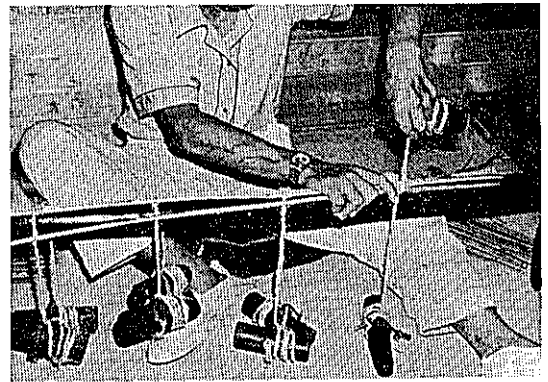


図6 こも筒を前後に交替させて編む

2) 籠作り：細目の縄を4本、こも筒と呼ばれる駒に巻き取っておく。このこも筒につけた縄によしずを編み込んで、図6の如く駒を前後に交換し、最後に紐をくくって終了。

3) 箒作り：ぬい穂作り。上から1つ目の節で蘘を折り取る。小さなぬい穂の束を5~6束作る。束を集めて横に並べ、大きな束にして3ヶ所程、細目の針金で縛る。針金は長目に残し、図7の如く、把手部に芯として埋め込む。小さな束が横に並ぶようビニールテープでとめる。最後に先を切り揃えて終了。

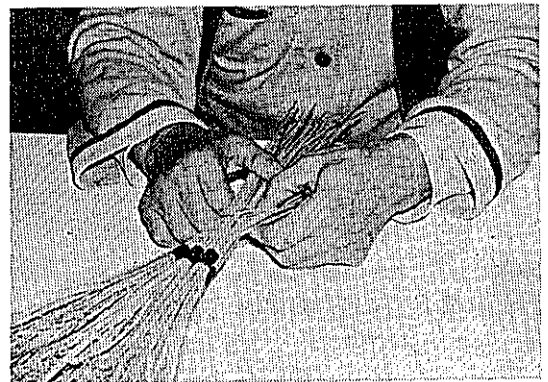


図7 縛った針金を、柄の芯にする



図8 小さい束が横に並ぶよう、ビニールテープでとめる

Ⅱ 考 察

1. 農村部の患者が多くを占める当院の場合、既存のアクティビティ (ex. 簾細工, 皮革細工, マクラメ編み他) は、男性、殊に高齢の場合、作業内容によっては拒絶的傾向を示すこともある。また女性の場合でも、未経験の作業に対し必要以上に緊張したり、退院後も作業療法として継続する事が困難な場合が少なくない。その点、薬仕事は農山村の患者にとって馴染みが深く、作業に対する異和感や緊張感が少ない。

2. 身近な材料であり、応用・工夫の可能性が多く、製品の実用性を知っているため、家庭復帰後も訓練を兼ねて取り組み易い。薬は生活の中で親しみのある材料であり、農家の人にとっては入手が容易なため、家庭内訓練にも生かし得ると考える。現在の農家において、薬製品は利用度が少

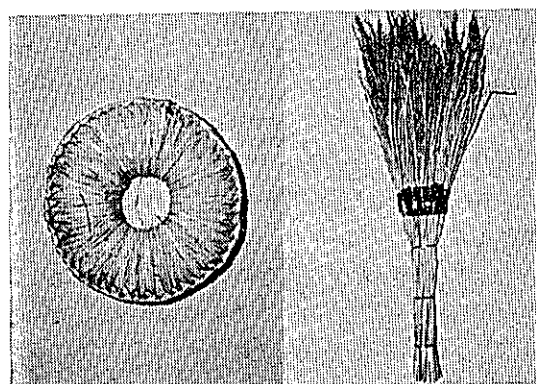


図9 実用品 2 例

なくなるとはいえ、実用品としての価値を有する物があり、年寄りの作った物を利用する習慣も残っている。また装飾品として、より完成度の高い物を要求されている。一例を挙げると、実用品として、箒・鍋敷など (図9), 装飾品として、草鞋・藁靴など (図10) が挙げられる。

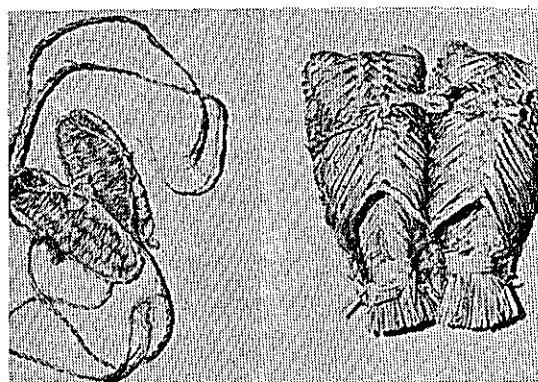


図10 装飾品 2 例

3. 作品の評価が容易なため、自己の能力の確認が可能である。

4. 作業選択、性別を問わず集団指導も可能である。最も基本となる縄ない作業は、長坐位の必要性、屈筋への強い刺激、両手の高度な協調性を要求される等片麻痺患者にとって困難な作業といえるが、患者同志力を貸し合う場合も見られる。

5. 運動機能のみならず、感覚刺激としても充分受容できる。薬仕事は両手協調を要求され、運動機能レベルとして、ブルンストロームの回復段階でいえば、腕、手指共に4以上でないといけない場合が多い。つまり軽度な麻痺レベルでないといけないが、種目によっては、片手に簡単な固定力があれば可能なものもある。

6. しかし、問題点も幾つか挙げられる。まず、薬は患者の厚意で入手できたが、今後入手ルートを確認する必要がある。次に薬を管理するに当たり、広いスペースを必要としたり、薬打ち後、空気に当てぬよう管理する煩雑さがある。更に、作業手順が多岐に渡るため、機能回復レベルを考慮した上、作業肢位、補助用具等の検討も必要と

なる。

ま と め

農村部の、殊に高齢の男性患者に対し、藁作業は既存のアクティビティより、むしろ受け入れ易

いものであった。また、高齢の障害者が実用品を作り、家業に協力できることは、機能回復と相交って精神・心理面での意義が高いと思われる。